



巻き込まれ召喚!? そして私は『神』でした?? 6

α L P H α L I G H T

まはふる
Mahapurū



アルファライト文庫 

Characters

ダンフィル

アンジーの護衛人。
元Aランク冒険者。

ガレーシャ

犯罪者ギルドの長。
数々の無効化スキルを持つ。

アンジー

アルクイン侯爵家の令嬢。男勝りなタクミの婚約者(仮)。

レナン

元役人見習い。先日の戦いで軍にスカウトされた。

タクミ

先日定年退職した平凡な男。異世界ではなぜか若返っている。職業は「神」だが、本人はよくわかっていない。

シシリア&クリス

カレドサニア王国の王女様とその幼馴染。

シレストン

主家を変え、現在はアルクイン家の執事。



目次

第一章 真と偽と、表と裏と 7

第二章 王太女一行と犯罪者ギルド

第一章 真と偽と、表と裏と

こんにちは。

私の名は芥木拓末、年は還暦を迎えての六十歳、定年後を日本でのんびりと暮らす平凡な市民です。正確には、~~で~~としたと過去形なわけですが。

ひよんなことから異世界とやらに召喚され、十万もの魔王軍との戦争を皮切りに、まあ起こるわ起こるわ非日常のオンパレードです。以前の日常とは隔絶した生活を送る羽目になりました。

王様暗殺未遂容疑やそれによる逃亡生活。魔物の軍勢に魔窟に巨大イカと、相次ぐ戦闘。エルフという異種族との邂逅と共闘。国教教会、総本山でのお家騒動……もう、お腹いっぱいですね。

それこそ、なぜこんな目に遭うのかと神様に問い質したいところですが、どんな因果か、私とその『神』でした。なんの冗談なのでしょうかね、まったく。

とはいえ、異世界の生活自体はわりと捨てたものでもありません。知人も増えまして、

それなりに楽しくやっているとつもりです。

国家反逆罪で護送されたときも出会いや再会がありましたし、魔王軍による王都陥落のときでも新たな戦友を得ました。……不穏な事態ばかりな気がしますが、そこは置いておきましょう。

その後、ついに私も冒険者デビューしました。ちよつとした理由から、サブ的なサポートメンバーではありますが。

SSランク冒険者パーティ『青狼のたてがみ』に加えてもらい、女王様直々の指名依頼を受けることになりました。依頼内容は人捜し。同じ日本からの召喚者にして三英雄のひとりである、行方不明の『勇者』の搜索です。

目的は国土の約三割を占めるといってトランデュートの樹海。

ここでも、色々と事件が起こりました。なにか、行く先々でトラブルが巻き起こっているのは、気のせいでしょうかね。

そして、今——場所を移り、ここは王都カレドサニア。『青狼のたてがみ』の皆さんに先行しまして、一足先に戻ってまいりました。

皆さんと別れて、早二日。行きの馬車旅では半月くらいかかりましたが、帰りは〈万物創生〉を駆使して急いだけに、思いのほか早く帰りましたね。『勇者』のエイキに『劍聖』の井芹くんと、身体的に頑丈な方ばかりでしたので、多少の無理も利いてなによ

りです。

まずは戻った足で登城し、女王様に事の経緯を報告しました。

そのときには、もう『青狼のたてがみ』に同行しているフウカさんからの〈共感〉スキルによる報告が届いており、面会自体はすんなりと終わりました。

そして、肝心のエイキの処遇についてですが……

人の魔物化——つまりは魔人化。『勇者』だけに『勇魔』ですか。これについては、意外に重要視されました。要は危険視なわけですが、今後の経過を見るためにも、エイキは王城内に留め置くことになるらしいです。

あれ以降、エイキに例の兆候はありませんでしたが、実態が解明できない以上、いつまた正気を失わないとも限りません。いざというときに対処できる監視役が必要となり——そこは大いに悩みどころでした。なにせ、相手は『勇者』です。並みの者では防波堤になることすら難しいでしょう。

そこに立候補したのは、なんと『劍聖』の井芹くんでした。正直なところ、他に最適な人材は思いつきませんでしたので、渡りに船です。

一時は敵対したとはいえ、お互いに剣を交えた間柄ですから、友情でも芽生えたのかと喜ばしく思ったのですが——

「あやつの軟弱で捻じ曲がった性根を鍛え直してやろう」

との、にべもないお答えでした、はい。

まあ、三人で一緒に過ごしたこの二日間、エイキの態度に幾度となく憤慨していた井芹くんですから、なんだかごもつともな気がします。

ちなみに、エイキは青い顔をしていました。通常の腕つぶしでは敵わないのを理解しているみたいです。あと、冗談や軽口が通じない性格も。

さんさん嫌だごねていましたが、「では仕方ない。念のために両腕を落としておくかなに、安全と判断したらくつつけてやろう……斉木が」という真顔の脅迫に、さすがの『勇者』の心も折れました。結果的に承諾を得られてよかったです、さりげなく責任だけをこちらに投げる無茶振りはやめていただきたいものです。

嘆息しているエイキの裏で、井芹くんがこっそり「あやつには才能がある」と教えてくれましたので、ただいたぶるのではなく、心身ともに鍛えてあげるつもりです。どちらにせよ、スパルタにはなりそうですが、自身のためにもエイキには頑張ってもらいたいところです。

そんなこんながありまして、私はまた気ままな独り暮らしに戻ってしまいました。

もともと王都に知人も少なく、暇を持てあました私は、冒険者ギルドに顔を出すことにしました。

冒険者ギルドのカレドサニア支部では、職業幹旋業務も行なっておりますから、王都復興作業がいち段落したとはいえ、私にもできる仕事があるかもしれませぬ。

『スカルマスク、クリエイトします』

冒険者ギルドといいますと、やはりこれでしょう。特になぜかこの王都支部では、タクミクという素性に過剰反応されていますから、変装すべきですよね。

「……ごめんください」

久しぶりに訪問した冒険者ギルドは、さすがの熱気と混み具合です。繁盛しているようですね。

人波を躲しながら（といっても、勝手に道を譲ってくれるのですが）奥に進みますと、受付カウンターの傍に気難しい顔をした背の高い女性の姿が見えました。

お柄な人が多い冒険者さんたちの中でも、頭ひとつ分突き出た鮮やかな赤毛の女性は、こちらのギルドマスターのサルリーシエさんですね。

「おお、黄金の鬨饅頭面ではないか！ 久しいな！」

挨拶でもと思った矢先、こちらに気づいたサルリーシエさんのほうから足早に歩み寄ってきました。迎え入れるように両腕を広げたまま、満面の笑みです。

嫌な予感に首を傾げますと、たった今まで私の頭部があった位置を、豪腕が唸りを上げて通りすぎました。

「よし、見事な反応だ！腕は鈍ってないようで結構結構！」

サルリーシエさんはご機嫌のあまり気にされていなそうですが、私の背後にいた数名が拳の余波を受けて弾き飛ばされていったのですが……大丈夫でしょうかね？

「聞いたよ、北の都カランドーレで、また派手に活躍したそうだね？そろそろギルドに加入する気になつてくれたかな？ん？」

がっちり肩を組まれました。本当にサルリーシエさんはノリが体育会系ですよね。

「いえいえ、気が早いです。それはまだ先の話ですよ」

「そうか、今回は残念だが諦めよう。しかし、いつまでも待っているぞ？」

両手を固く握り締められ、熱い眼差しを向けられました。

実際には、私は、タクミン、なわけですから、そちらで登録してしまおうと、スカルマスク、としては登録できないわけで……話す機会を逸してしまっている分、熱烈さには困ってしまいますね。

「登録でないというなら、今回はなんの用かな？もちろん、どんな瑣末な用件でも歓迎するが」

周囲から注目も浴びていますし、ちよつとした仕事探しに……とはい出しにくい雰囲気になってしまいましたね。それによく考えれば、スカルマスクとして仕事を受けてしまいますと、仮に土木作業に従事するとしても、この仮面姿でやるわけですよ。日中

では籠った熱と息苦しさで倒れそうな気がします。失敗しました。ここは出直したほうがよいでしょう。

「……特に理由はなく、ふらつと……ですかね？まあ、私のことはいいではありませんか。そちらこそ、なにか難しい顔をされていたようですが？」

とりあえず、誤魔化しておきましょう。

「いやなに、無効依頼が溜まってきたから取捨してほしいと、受付から苦情があつてね。

本来はわたしの仕事ではないのだが、立ち寄ったついでに見に来たのだよ。それでキミと会えたのだから、無駄ではなかったかな？ははっ」

「はあ、無効依頼ですか……」

サルリーシエさんが指し示すデスクの上には、紙束が重ねられています。一見したただけでも、相当な量ですね。

「そう。大半は依頼人名や報酬、依頼事項の記入ミスだね。いったんは受理されたものの、不備があつた場合はこうして集められる。なにせこの支部には、各支所から送られてくる分もあるのですね。定期的に処理しないとこの有様というわけだ」

ぼんぼんと叩く依頼書の束は、数百枚に及びそうです。冒険者ギルドの支部ともなりますと、このような職務もあるのですね。

この量を手作業で確認するのは、教人がかりでも一日仕事でしょう。担当者のうんざ

り顔が目に浮かぶようです。こちらの世界の事務方も大変そうで、ご苦労様ですね。「そうでしたか。では、仕事のお邪魔になりそうですので、私はこの辺でそろそろ……」上手いこと話も逸らせたようですし、そそくさと帰ろうとしたのですが。

(……ん?)

なんでしよう。ふと後ろ髪を引かれるような思いに駆られました。

「どうしたのかね?」

「いえ、その……なんでしようね?」

具体的にそれがなんなのかは説明できませんが、このまま帰ってはいけないような気がします。

無造作にデスクに重ねられた依頼書の束——気づいたときには、そこから飛び出た一枚の紙の端を、無意識に引き抜いていました。

「おotto、悪いが無効依頼でも守秘義務があつてね」

中身を目にする前に、即座にサルリーシエさんにもぎ取られてしまいました。

「……うん? これは酷い」

依頼書に目を落としたサルリーシエさんが、不意に顔をしかめました。

「見るかね?」

「いいのですか?」

「これなら構わんよ。どうせ子供の悪戯だろう。これまでも、無垢な子供からのペットや失せ物捜しといった他愛のない依頼はあつたが、これはあんまりだ。報酬や内容が曖昧などど、それ以前の問題だな。送り先は……ケルサ支所か。東の城砦の先、南東にある小さな村だったかな。なにを思つてこのようなものを受理したのか……職務怠慢で査察対象だな」

サルリーシエさんが拳を打ち鳴らしながら、にやりとサデイスティックに微笑みました。処分されるのがこの依頼書だけで済むといいますが……どなたか知りませんが、ご愁傷様です。

「お言葉に甘えまして……どれ。なるほど、これはたしかに」

サルリーシエさんが憤るのも当然で、この紙はそもそも依頼書としての体を成していませんでした。通常、依頼書には専用の用紙があるのですが、これは単なる折り畳まれたそこいらの紙切れです。紙の下の部分には、依頼人でしょうか、名前が記されていました。その名は——

「……アンジー?」

って、あのアンジークくんじゃありませんよね? アンジークとはあくまで愛称で、本名は、アンジェリーナ・アルクインです。ですから、こうした正式な書類にまで愛称を書かないでしよう。

「ふむう？」

仮に私の知るアンジーくんだとしましても、侯爵令嬢が、わざわざこうして冒険者ギルドに依頼を出す意味がわかりませぬよ。やはりこれは、単なる偶然の一致なのでしょう。などと、呑気に構えていたのですが、紙の残りの部分を広げて依頼内容を目にした途端に、そんな気分は吹き飛びました。そこにあったのは、子供の稚拙な字での大きな殴り書き――

『たくみにいちゃんたすけて』の一文だったのですから。



隙間風の吹き抜ける朽ちかけた小屋の中に、男と少年の姿があった。

頬に傷を持つ壮年の男は、申し訳程度のシート代わりの枯草に身を横たえており、顔は血色を失い青白く、それと対照的に胴体に巻かれた包帯が鮮血で染まっていた。一見すると死体と見紛う状態だが、わずかに残された生を主張するかのように胸元がかすかに上下し、ひび割れた唇からは弱々しい吐息が漏れている。

そして、オーバーオールを着た少年――の格好をした少女は、傍らで膝に顔を埋めて座っていた。表情は窺えないが、丸めた小さな身体が小刻みに震え、嗚咽が隠しきれずに

漏れている。

目深に被った少女の大きな帽子から零れている銀色の長い髪束が、男――ダンファイルには、ほやけた視界の中で、彼女の流す涙のように見えていた。

「お、お嬢……?」

「ダンフ!? 気がついたのか!」

咄嗟に顔を上げた少女――アンジェリーナが、目元を拭って這い寄ってきた。

どうもまた、しばらく気を失ってしまったらしい――ダンファイルはそのことを悟り、不甲斐なさに自嘲する。

「……なんですかい、俺が死んだとでも思いましたか? 勝手に殺さないでもらいたいです」

自嘲ついでにいつもの軽口を叩くが、己の声のあまりのか細さにダンファイル自身が驚いた。主たる少女にこれ以上の心配をかけさせまいと、意識して声を張り上げないといけなかった。

「……………あ」

その軽口に、アンジェリーナの肩が震えたのが見て取れた。

どうも、本気でそう思われるくらいには酷い状況らしい。失言に気づき、安心させたくて手を伸ばそうとしたが、意識に反してダンファイルの腕はびくりとも動かなかった。

（けつ。元Aランク冒険者、『紅い雷光』の雷火。ダンフィル様ともあろう者が、情けねえ……）

冒険者時代を含め、悪運でなんとか生き永らえてきたが、どうやらここまでのおようだった。アンジェリーナを庇って、先日負った傷は悪化の一途を辿っている。ろくに手当てもできずに、戦闘に次ぐ戦闘、昼も夜もなく逃げ回り続けたのだから、回復する見込みがないのも道理だろう。

「ダンフ……ダンフ……」

声が聞こえ、ダンフィルは重い瞼を持ち上げた。

また一瞬、意識が飛んでしまっていたらしい。こちらを覗き込みながら、不安げに眉をハの字にするアンジェリーナの顔が至近距離にある。

ダンフィルのおぼろげな意識の中で、アンジェリーナが先代——彼女の祖父と重なった。アンジェリーナは隔世遺傳の気が強く、見事な銀髪は先代と同じもので、顔立ちは美人と評判だった先代の奥方から受け継いでいる。

幼子の時分は妖精のような可憐さで、将来は清楚で美麗な令嬢になるだろうと誰もが疑わなかったが、先代の交友関係の影響で、中身と言動はだいぶ男勝りになってしまった。侯爵家にはそれを惜しむ声もあったが、ダンフィルにとってはまるで先代を見ているようで、失望も退屈もなかった。むしろ、好ましくすら感じていた。

先代には、冒険者時代に命を救ってもらった大恩がある。そのときの怪我が原因で、結局は冒険者を引退せざるを得なかったが、ダンフィルは逆にそれが恩返しをする機会だと、かなり無茶をして先代のもとに転がり込んだ。そして、わずかながらも恩に報いている実感を得られはじめた矢先——先代は急死してしまった。

だからこそ先代が亡くなると、孫娘のアンジェリーナを託されたことは、ダンフィルにとっての新たな生きがいとなった。この娘の成長を見守り続けよう、それが先代への恩返しとなると。

（それも、どうやらここまでか……わかっちゃいたが、こんなちゃんけな俺の願いを叶えてくれる酔狂な神様はいねえようだ）

ダンフィルはすでに覚悟を決めている。

冒険者稼業が長かっただけに、人の生き死にに何度も立ち会い、どんな傷を負えばどれだけ生きられるかなど、容易に判断できた。そして、客観的にそれに当てはめると——この傷では、まず自分は助からない。明日が知れないどころか、数秒先を生きていられる保証もないだろう。

「ダンフ、しっかりしろよ！ もうしばらくの辛抱だからさ！ きつとタクミ兄ちゃんが助けに来てくれるから！」

（タクミ、か……）

ダンフィルの脳裏にほんやりと像が浮かぶ。サランドヒルの街で出会った不思議な青年。結果的に冤罪ではあったようだが、国家反逆罪の疑いをかけられていた男。罪人扱いの身でありながら、それをまったく感じさせないくらい飄々としており、雲のように掴みどころがなく、そして底が見えないほどに強い。それは、在りし日の先代を彷彿させた。

あの男勝りだったアンジェリーナが、港町アダラスタから帰ってきてから、恋する乙女になっていった。ダンフィルは、それ自体は驚きだったが、そんな年頃の少女らしい心境の変化に、嬉しさも覚えていた。毎日、タクミのことを楽しそうに語るアンジェリーナを目の当たりにし、穏やかな幸せすら感じていたほどだ。

あの男が来れば、アンジェリーナを窮地から救い出してくれるかもしれない。そんな根拠のない予感はある。だが、あくまで、本当に来れば、だ。

アンジェリーナが制止を振り切り、単身でケルサ村の冒険者ギルドに駆け込んだのが十日前のこと。独立組織の冒険者ギルドとはいえ、連中の息がかかっている恐れがある以上——職員の目を盗み、王都支部行き書類の中に、その場で急いで綴った手紙を紛れ込ませるのが精いっぱいだったと聞いている。

それ以来、アンジェリーナはあの男が助けに現われるのを疑いもせず一途に待ち続けているが……ダンフィルは重ねた年齢の分だけ、世間がもつとろくでもなくてきていることを知っている。

運よく手紙が処分されず、運よく王都に届き、運よくタクミが目にして、運よくこの場を割り出し、運よく助けにきてくれる——呆れるほどに都合のいい運頼り。

問題はそれだけではない。ケルサ村から王都までの距離は軽く二百キロ以上。手紙が王都に届くまでに要する日数として十日前後。つまり、最低でも移動に同じ日数を要することになる。これまで十日間逃げ続けただけでもこのざまなのに、さらに倍の日数を持ち堪えるなど無謀にもほどがある。これからは、もう自分もいなくなるというのに。

どれだけの奇跡、どれだけの幸運を積み重ねれば、それが成し得るといえるだろう。それこそ、まさに神の御業の領域だ。現実的に考えて、あるわけがない。ただそれでも、この愛らしい幼い主が生き延びるためには、その蜘蛛の糸よりも細い希望に縋るしかないのだ。

「……！……！」

ダンフィルの霞みがかかった視界の中では、アンジェリーナが自分の手を握り締めながら口をばくばくさせていた。もう耳も聞こえなくなってしまうらしい。手を握られているという感触もない。次第に、残る視覚も暗い闇に閉ざされようとしていた。

……ついに、時間切れらしい。願わくは、神の恩寵がわずかなりともこの娘のもとに——腕を頼りに生きてきた無頼漢が神頼みなど、柄ではないことは自覚していたが、そう祈らずにはいられない。

ダンファイルが己の最期を悟ったそのとき——
咽び泣くアンジェリーナの背後で、小屋の扉が開いたのが見えた気がした。



「ぎゃあああああ——!! ががががが、骸骨! お化け出た~~~~~」
扉を開けた私を、どこかで聞いたことのある金切り声での絶叫が出迎えました。
古びた小屋の中で硬直しているのは、大きな帽子にオーバーオール、初めて出会った頃の格好そのままの、捜し求めたアンジーくんです。ようやく会えました。

「……やつと見つけましたよ。私ですよ、アンジーくん」
スカルマスクを脱ぎ、アンジーくんに笑いかけました。

大口を開けたままびっくりしていたアンジーくんですが、次第にその双眸に涙が溢れ——怒涛の勢いで腰に体当たりしてきました。うん、ナイスタックルです。

「兄ちゃん兄ちゃん兄ちゃん兄ちゃん兄ちゃん! ぶああ〜! 兄ちゃん!」
アンジーくんが私のお腹に顔面をぐりぐりと擦りつけてきました。ついでに右の脇腹に、どすどすと左拳で連打されています。

うん、ナイスレバーブローです。相変わらず、過激な感情表現ですね。

「よかった、元気そうですね。安心しました」

帽子の上から頭を撫でますと、はっとしたようにアンジーくんが顔を上げました。

「あ! 全然、元気じゃないんだよ!」

「え? そうなんですか?」

どこをどう見ても、力がありあまっていそうですが。

「違うよ、ダンフが! ほら、ダンフ! タクミ兄ちゃんが来てくれたよ! もう大丈夫だから!!!」

急ぎ足で小屋に戻るアンジーくんに続いて、私も中に足を一步踏み入れますと——むせほどの濃厚な血の臭いがしました。これは、死臭といってもいいかもしれません。

朽ちかけた小屋の中で仰向けに倒れているのは、アンジーくんの護衛のダンファイルさんでした。久しぶりにお会いしましたが、あれだけ生気に満ちていた精悍な面立ちはそこになく、重篤患者どころか、まるで死人が横たわっているようです。

臭いの原因は彼でした。胴体に巻かれた包帯が、白い部分がないほどに血でどす黒く染まっています。一見ただけでも、かなりの大怪我をしているとわかりました。

「ダンファイルさん!」

即座に駆け寄って抱き起こしますと、辛うじて意識はあるようで、焦点が定まらない視線が宙を泳ぎました。身体を揺らして声をかけますが、反応は痙攣にも見える微々たるも

ので、こちらの声が届いているのかもわかりません。

「う、あ……あんた、か……」

ほとんど聞き取れないような細かい声が、血を滲ませた唇の隙間から漏れました。

「……ああ……よかつ……お嬢、を……頼……」

途切れ途切れの微かな声——それでも残った渾身の力を振り絞つての言葉だったのでしょう。ダンフィルさんはいい終えますと、満足げに目を細めました。笑おうとしたのでしょうか。

そして、なにかを求めて掲げようとした手が、あえなく空振り……力を失くして下に落

ち——

「ダンフ!? や、やだ——!」

おっとこれはいけませんね。

「ヒーリング」

——落ちかけた手が、途中でびたりと止まります。

アンジーくんもまた、ダンフィルさんに手を伸ばした状態で固まっていました。

「……………」

「……………」

危ないところでした。間一髪でしたね。



ダンフィルさんは私に抱えられながら、アンジーくんと一緒に目をばちくりとしていました。

「ふう。で、ご気分はいかがでしょう？ 念のためにもう一回、ヒーリング。おまけにヒーリングと——あ」

どごすっ。

「~~~~~！」

ダンフィルさんは、あまりに勢いよく上体を起こしたので、私の顎に頭突きをする羽目になりました。私は痛くないですが、ダンフィルさんは物凄く痛そうです。すごい音がしましたしね。頭を抱えて悶絶しています。

「大丈夫ですか？ 気をつけてくださいね。ということで、ヒーリング。どうですか？」

「……………痛くない」

「それはよかった」

頭のことかと思ったのですが、ダンフィルさんはいきなり上半身をはだけた上、巻いてあった包帯すらも剥ぎ取って、自身の身体をつぶさに観察していました。うーん、ワイルドですね。

「傷が……治って、る……？」

「まあ、回復魔法をかけましたからね。治らないと困りますよ」

「は、はは……」

ため息を吐くように息を漏らしたかと思えますと、ダンフィルさんは脱力して、下を向いたまま力なく笑いはじめました。どうしたというのでしょうか。

「やった……やった、やったー！ やっぱすごいや、兄ちゃんは！」

対して、アンジーくんは狭い小屋の中を跳んだりはねたりの大騒ぎでした。元気いっぱい、喜びいっぱいいな姿を見ているすと、こちらまで嬉しくなりますね。記憶通りのアンジーくんです。

（どうやら間に合ったようですね）

急いで王都を出発して以降——一時はどうなることかと心配しましたが、おふたりとも、無事でなによりです。

「ははは………はあ。あの悲愴な思いはなんだったんだ……こつ恥ずかしくなってきた。なんかもう、どつと疲れたぜ。つてか、まさに生き返った気分だな」

ダンフィルさんはひとりそんなことを呟いていました。

ふたりが落ち着くのを待つてから、あらためて情報交換することにしました。

掘った小屋には床板など高級なものはありませんので、剥き出しの地面には敷物代わりにわずかばかりの枯草が重ねてあります。その上に座るダンフィルさんが姿勢を正しま

したので、私もそのお向かいに腰を下ろしました。「まずはお嬢の危機に馳せ参じてくれたことに礼を言わせてくれ。あとは、俺の命を救ってくれたことも。感謝している」

胡坐をかいた両膝に手を置き、まるで武士のようにダンフィルさんが深々と頭を下げました。

ダンフィルさんにとつては自分の命を救われたことよりも、アンジーくんこのほうが、優先順位としては上なのですね。表面上はいつものぶっきら棒そうなダンフィルさんですが、端々に垣間見えるその真摯な気持ちに、胸が温かくなる思いです。このような方がそばについていてくれて、アンジーくんは本当に幸せ者ですね。

ちなみに、そのアンジーくんはといいますと、当然とばかりに私の膝の上でした。普段は正座が慣れているのですが、アンジーくんの椅子代わりとしてはお尻の座りがいいだろうと、私も胡坐をかいています。

「ん〜♪」

……のはずだったのですが、なぜかアンジーくんがこっち向きでコアラ抱っこになっているため、若干座りにくそうでした。本人はご満悦の様子で私の胸に頬をすりすりしていますので、気にしないでもよさそうですが。

それはさておき。今のこの有様を見ても、のつびきならない状況でしょう。

国内有数の大貴族であるはずのアルクイン侯爵家の方々が、逃亡生活と思しき現状。ダンフィルさんが落命しかけるほどの大怪我をしていたことから、その怪我をさせた相手がいるということです。駆けつけるのがもうほんの少し遅ければ、確実に命を落としていたでしょう。そして、ダンフィルさん亡き後、残されたアンジーくんにも、どのような運命が待ち構えていたのか……想像したくありませんね。

無意識にアンジーくんの頭を撫でていきますと、当の本人は気持ちよさそうに目を細めていました。

「あなたは、今、俺らが置かれている状況をどのくらい理解している？」

「現状から推測しますと……あなた方には敵対者がいて追われている。しかもこちらは寡兵で、侯爵家としての力はもちろん、頼れる味方もいない。対して相手は組織立っているのではないですか？ ダンフィルさんの方がこうして追い込まれているくらいですか。違いますか？」

とりあえず、思いついたままに述べますと、ダンフィルさんが感心したように口笛を吹きました。

「へえ、意外に鋭いじゃないか。状況証拠だけで、それだけわかりやあ充分だ。冒険者の素質があるかもな」

「それはどうも。それからついでに付け加えますと……もしかして、その相手こそがアル

クイン侯爵家に属する方々だったりしませんか？」

その言葉を口にしますと、ダンフィルさんの顔色が明らかに変わりました。

「……どうしてそう思う？」

「実は私、こちらへ向かう際に途中で不時着したのですが」

「不時着？」

あ、そこは流してもらって結構です。

「目的地としていたケルサ村までは、それなりに距離がありましたので、そこからはアンジーくんを捜しがてら、徒歩で向かっていたのですが……途中でほうぼうの道路を封鎖する一団を何度も見かけましてね。その方々の身につけていた家紋に見覚えがありました」
以前にサランドヒルの街で目にした、アンジーくんたちの馬車に掲げられていた紋章と同じものでしたからね。記憶に残っています。

「最初はアンジーくんを捜索しているのかとも思ったのですが……あの様子では、とてもとても」

全員が殺気立っており、まるで脱走者を逃がすまいと包囲網を張っているかのようでした。どう好意的に見ましても、誰かの身を案じているふうではありませんでしたから。

「……身内の恥を晒すが、せいづらはあんたの予想通り当家の人間だ。アルクイン家の所有する元冒険者や軍部出身者を集めた私設部隊の連中だな。普段は領内の守護、有事には

先鋒となり荒事を担当している」

「そのアルクイン家の方々同士で、どうして敵対するようなことに？」

アンジーくんは侯爵令嬢、ダンフィルさんは付き人です。むしろ、その方々に守られる立場にある人たちなのに、逆に狙われるというのは腑に落ちません。

ダンフィルさんは終始難しそうな顔をしていました。よほど、口にしにくい重大な理由でも———と思ったのですが。

「正直、わからん」

あつげらかんといい放ちました。

「わからない……ですか？」

「ああ。それこそさっぱりでな、こつちが説明を求めたいくらいだ。もともとケルサ村の近くは、アルクイン家の避暑地だな。その別荘に、うちの旦那——アルクイン侯爵が先月から滞在している。俺らは半月遅れてやってきて、到着してから数日は何事もなく過ごしていたんだが……ある日突然、旦那の命令で追われる身となったわけだ。参るぜ、ったくよ」

ほりほりと力任せにダンフィルさんが頭を掻いていました。口にしにくいのではなく、口にできるだけの理由がなかったということですか。

「なんでも、お嬢が『偽者』だから捕まえろ、ということらしい」

「……は？　なんです、それ？」
偽者？　アンジーくんが？

思わず胸元を見下ろしますと、そのアンジーくんも上を向いていましたので、お互いの鼻先が触れ合いそうな距離で目が合いました。

大きな瞳に長い睫、整った顔立ちの白い肌に輝く見事な銀髪が映えます。ちよつと高めの体温に、幼さを残した丸みがかつた頬はぶにぶにで、勝気な表情が微笑ましい——いつもの通りの愛らしいアンジーくんですね。

「ちよ、タクミ兄ちゃん、ほっぺをむにむにしないでよ！　オレだつて照れんだよ!？」

あまりに手触りがよさそうでしたので、いつの間にか両手でつんつんしちやつてました。アンジーくんは途端に赤みを帯びた顔になり、照れ隠しの右拳が鳩尾にヒットします。

うん、この活発な言動といい、私の記憶通りのアンジーくんですね。なんら問題はありません。

「アンジーくん自身に心当たりはありますか？」

「ううん、オレにも全然……」

ふむ、なんとも奇妙な話ですね。娘さんであるアンジーくんの前でなんです、お父さんが錯乱したとしか思えません。

遠回しにダンフィルさんに訊きますと、さらにまたおかしな答えが返ってきました。

「それが旦那含めて、全員がそう信じ込んでいるみたいですよ。こつちが何度説明しようとしても聞きもしない。それどころか逆賊扱いで、問答無用と襲いかかってくる始末だ。なんでも、別荘にはきちんと『本物のお嬢』がいるらしくてな」

「……それはまた、なんとも」
「だろ？」

お互いに首を傾げるほかありません。

「ま、それはそれとしてよ。変装かなにか知らないが、ずつとさっきのあの珍妙な髑髏を被って行動してたんだろう、あんた？　そんな中をよくお咎めなしに通ってこられたな？　発見即捕縛されて然るべきってな気もするがよ」

「ちつちつちつ、そこは秘策がありまして……姿なき亡霊——存在を認識できなくなる古代遺物です」

立ち上がり、創生したコートを身に纏いまして、ダンフィルさんから数歩距離を取りました。それだけでダンフィルさんからは、目の前にいるはずの私が消えたように映るはずです。

「ほお、これは素晴らしいな！」

「でしよう？　声も聞こえなくなるんですよ」

「だがよ。そんなものがあるんなら、そんな髑髏で変装する必要はないんじゃないか？」

「……………ああ」

もとの位置に座り直し、静かにコートを脱ぎます。

「様式美です」

「いや、その間は、今初めて気づいた。ってやつだろうか？」

そうともいうかもしれません。

「これからの対応だが、まずはお嬢を安全な場所に逃がすことを第一としたい。そのコートを複数用意することは可能か？ あんたが王都からここに来たルートは利用できないか？」

「コートの用意は可能です。ですが、ルート……といえますか、方法はお勧めできません」

「一応、訊いておくが……なぜだ？」

「まずは大砲の砲身に、こうやって弾代わりに身体を詰め込むのですが——」

「そうか、もういい。訊いた俺が馬鹿だった」

至極、真面目な表情で打ち切られてしまいました。

「ともかく、アンジーさんの身の安全を図ることは賛成ですが、このまま逃げ続けて大丈夫なのですか？ 原因を解明しなければ、事態を先延ばしにするだけで、解決には至ら

ないでしょう？」

あらためて、アンジーさんの頭を撫でました。

目が合い、にぱつとアンジーくんが微笑みます。今はダンフィルさんが助かった安堵と、私との再会の喜びで一時的に忘れてしまっているようですが、実の父親に追っ手を差し向けられているという現状は、わずか十歳の少女には並々ならぬストレスでしょう。アンジーくんのこの微笑みを曇らすわけにはいきません。

「じゃあ、どうすると？」

「せっかく近くに事情を知る方がいるのですから、ここで解決してしましましょう。別荘に乗り込み、アンジーくんの親御さんに直接問い質してみようかな、と」

ダンフィルさんがあんぐりと大口を開けていました。

そんなに突拍子もないことを言いましたかね、私？ 実に効率的だと思うのですが。

「……おいおい、そりゃあ大胆すぎんだろ。兄ちゃんにしてみれば、悪の親玉のいる場所だぞ？ そこに気軽に乗り込もうだなんて、豪傑なのか馬鹿なのか阿呆なのか……お嬢の搜索に大半が出払っているとはいえ、それでもかなりの警護は残してあるはずだ。あんたの実力は知っているつもりだが、いくらなんでも死ぬかもしれんぞ？」

「大丈夫ですよ」

「そうだよ。タクミ兄ちゃんが死ぬわけじゃないから！ ダンプは心配性なんだから。兄

ちゃんに任せとけば、全部上手くいくって！ ねー？」

アンジーくんの絶対の信頼が、なんだかこそはゆいですね。

「ふたり揃いも揃って……お嬢もあれだけ泣きべそかいてたくせに、愛しのタクミ兄ちゃん^がが来た途端に現金ですね。少しは危機感とか持ちましようよ」

「だ、誰が泣くもんか！ 余計なお世話だ、ダンフの意地悪！ べ〜だ！」

おやおや、見事なあつかんベーですね。

「でもよ、兄ちゃん。実際問題、今も旦那が必ずしも別荘にいるとは限らないぜ？ それだけの危険を冒して、空振りだったときはどうするんだよ？」

「そのときは、あちらさん曰く『本物のアンジーくん』とやらに会ってくることにしますよ」

「……そうか、本気なんだな？」

ダンフィルさんから、怖いほどの真剣な表情で凝視されました。睨まれるように——といいますが、本当に睨まれていたわけですが、視線を合わせたまま数秒が経過します。

膝の上のアンジーくんも、私の手助けをしようと負けじとダンフィルさんを睨み返していますね。こちらは眉を吊り上げて眉間にしわを寄せるさまが、とても愛らしくはありましたが。

「はあく、わかりましたわかりました。俺の負けですよ」

降参の意を示して、ダンフィルさんが両手を上げました。

「それはどうも」

「やったー」

「……たしかにあんたのいう通り、お嬢の今後を考えると、ここではつきり白黒つけとくのが最善だ。ええい、くそつ、俺も歳かな。どうも守りに入っていかんな」

「いえいえ、なにを仰いますか。それだけダンフィルさんがアンジーくんを大事に考えているということでしょう？ 私だって、ダンフィルさんがアンジーくんを守っていてくれると信じているからこそ、提案できたのですし」

後顧の憂いなくとは、このことですね。さすがに、アンジーくんをひとり残したまま、大それたことをしようなどとは思いませんからね。今の万全な状態のダンフィルさんがついていてくれるのでしたら、心配はいらないでしょう。

「そうと決まりましたら、さっそくその別荘とやらに向かいたいと思います。詳しい情報ももらえますか？」

「まあ、待ちな。そう急くなよ。そういうことなら、もうひとりが戻ってからにしよう。

あいつもそろそろ戻る頃合いだ。ですよね、お嬢？」

「ん〜、多分。昼過ぎには戻るっていつてたし」

「もうひとり、ですか？ 他にもお仲間が？」

そういうえば、怪我をしたダンフィルさんは、応急ながらも手当をされて、枯草の簡易ベッドにきちんと寝かされていましたね。重傷の身でわざわざ自分でそんなことをする余裕があるとも思えませんし、アンジーくんの子供の腕力では大柄なダンフィルさんを抱えるのは無理でしょう。別の大人の方が他にもいたとしますと、納得できますね。

「タクミ兄ちゃんも知ってる人だよ」

「そうなんですか?」

私にアンジーくん絡みでの知り合いは、ほとんどいないはずですが……

「……ちよどいい。いったそばから帰ってきたみたいだな」

ダンフィルさんの言葉通り、小屋の外に人の気配を感じました。

控へ目にノックする音が聞こえます。申し訳程度に形を保っただけの壊れかけの扉ですのに、なんとも律儀なことですね。

「……………おや?」

しばらく待つてみました、その後は外からの反応がありません。どうしたのでしょうか?」

アンジーくんを膝から下ろし、こちらから扉を開けてみます。

「はて。誰もいませんね?」

と、私が入口から首を覗かせた瞬間――

小屋の側面の壁を突き破り、人影が飛び込んできました。開いた大穴の逆光を背にしたその人物とは――くすんだ銀髪を几帳面にオールバックに纏め、伶俐そうな顔には銀縁眼鏡、隙なく燕尾服を着こなした――まさしく執事さんでした。

片膝をついて伸ばされた手には、小型の折り畳みナイフが握られており、刃先が私の首筋に添えられています。

油断を誘ってからの奇襲とは。タイミンクといい、なんとも見事な手際ですね――シレストンさん。

「待つて待つて! やめろよ、シレストン! 兄ちゃんは味方だから!」

身体を潜り込ませるように、間に割って入ったのはアンジーくんでした。

「これは、お嬢様……失礼いたしました!」

シレストンさんが咄嗟に身を引いて距離を取りました。いつの間にか折り畳みナイフもしまわれており、胸に手を添えた直立不動の姿勢から、上体だけをきつちりと折り曲げて臣下の礼を取っています。

身なり同様の寸分の隙もない作法で、まるでここが高貴なお屋敷の一室かと錯覚してしまうほどでした。この埃っぽく小汚い小屋で暴れたにしては、黒い燕尾服や白色のシャツ、白手袋にも汚れひとつないのには、なにかコツでもあるのでしょうかね。

「よう、執事殿。お疲れさん」
 ダンフィルさんが胡坐をかいたまま、呑気に声をかけました。
 「これはいつたい……？ ダンフィル殿も……どう申したらよいのか。ことのほかお元気
 そうで」

ダンフィルさんに視線を向けたシレストンさんが、わずかに目を見開いて眼鏡のブリッ
 ジを上げていました。先ほどのまでの瀕死だったダンフィルさんしか知らなかったでしょう
 から、驚くのも無理はないのかもしれないですね。

「おうよ。おかげさんでな。かつてないほど絶好調なくらいだ」

「……事の次第をお訊きしても？」

ここは代表ということで、アンジークさんが説明することになりました。小柄な身体を懸
 命に動かし、身振り手振りを交えて説明しています。

……そこまで大仰なことはなかったようにも思えるのですが、その必死な解説っぷりも
 微笑ましいものですね。必要以上に私を褒め称えるのだけは、気恥ずかしくありませんが。
 「なんと、わたくしが留守にしている間に、そのようなことが。ほう、タクミ……貴方が。
 お嬢様よりお噂はかねがね聞き及んでおります。この度は、我が主の窮地にご尽力いた
 だき、ありがとうございます」

分度器で測りますと、ぴったり斜め四十五度になりそうな角度で、深々とお辞儀をされ
 ました。
 しかし、感謝の意はあっても、同時に胡散臭く思われているのもしかなようですね。
 アンジークんの死角からこちらに向ける眼差しは、明らかに怪訝そのものです。ただ、お
 互いにまったく知らない仲でもありませんし、ここは仲良くしたいところですね。

「ご無沙汰しています、シレストンさん。お仲間とは、あなたのことだったのですね」

「さて、わたくしと貴方は初対面かと存じますが？ どこかでお会いしたことがございま
 したか？」

素っ気ない返事です。むしろ冷然と聞き流されている感じがします。つれないですね。

「……そういえば、こうして素顔での対面は初めてでしたか。それではわからないのも無
 理はありませんね。これでどうでしょうか？」

『スカルマスク、クリエイトします』

創生したマスクを装備して、あらためて向き直りました。

「ほら、どうですか？ 見覚えありません？」

「……………!!!」

……おや？ シレストンさんが直立姿勢のまま固まってしまいましたね。心なしか顔色
 が悪くなり、滝のような汗を掻いています。

「どうしました？」

立ち読みサンプル はここまで